ネパールの難民救え

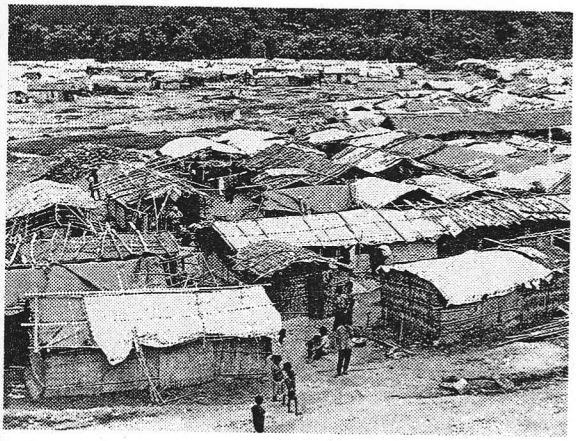
来月、医師団を派遣

AMDA本部

感染症で死者多発

看護婦含め4人チーム

アジア十三カ国の医師で組織する民間の国際協力団体・アジア医師連絡協議会（AMDA）＝菅波茂代表（四五）、本部・岡山市楢津、菅波内科医院内＝はこのほど、政情不安によるブータン難民が急激に流入しているネパールで難民の疾病状況など調査した。その結果、感染症で死者が多発するなど現地の生活・衛生状況は厳しく、AMDAは近く医師団を派遣する。



ネパールに流入しているブータン難民のキャンプ（山本秀樹医師撮影）

調査のきっかけは五月中旬、AMDAネパール支部から同本部へ、難民流入の連絡があったことから。AMDA本部は同日本支部の山本秀樹事務局長（三〇）＝岡山大医学部助手＝らを派遣。同ネパール支部と共同で五月二十五日から今月十八日にかけ三次にわたり調査した。ほとんどの難民が流入しているネパール東部の都市・ジャパ市周辺の五つの難民キャンプを巡回し、疾病状況、衛生環境などを調査するとともに各キャンプで診療を実施。また難民自身から難民発生の経緯など聞いた。

調査によると、ブータン難民が発生し始めたのは一九九一年初め。ネパール国内で起きた民主化運動の影響で、ネパール系ブータン人の間でも民主化運動が高揚。その勢力を恐れたブータン政府は国外撤去を強要。多数のネパール系国民が難民となり、ネパールに流入。ブータン難民は現在、約五万人だが、今年に入り急増。一日当たり三百～五百人がネパール入りしているという。

難民の生活状況は厳しく、現地のNGO（非政府組織）などが住居、食糧の援助を行っているが、急増する難民に対応しきれないのが現状。中でも医療面での医師不足は深刻で今年二、三月に赤痢が流行するなど、消化器や呼吸器系の感染症による死者が多発しているが医師は三人しかいない。

事態を重くみたAMDA本部は「ブータン難民救援プロジェクト」を計画。七月から数次にわたり医師、看護婦ら四人前後のチームをネパールに派遣、診療や健康教育など行う。

菅波代表は「今回のブータン難民への救済も一つの国際貢献の在り方。あくまで民間レベルの医療支援だが、ぜひとも成功させたい」と話している。